

第 6 回市史講座ミニレポート：平成 29 年 9 月 16 日（土）

「特色ある松江市内中世城館」

講師：山根正明先生（元松江市史料編纂室専門官）



山根正明先生の講座では、中世の山城について松江市内の例を中心に取り上げられました。

まず、山城調査とはその地域に住む人が「いつでも」「だれでも」参加できることを強調された上で、出雲国の山城のあり方から戦国の争乱について論じられました。

現在人々の目に見える「山城」とは、廃城となった最終段階の城が自然に戻りつつある姿であるとのこと。また、自然の地形や植生を観察しながら土塁（土を盛った砦）・切岸（山を削った傾斜）・曲輪（くるわ：城の区画）等を読み取る

ので見落とし部分も出てくるなど調査に当たっては注意を要します。その上で、戦国時代の各時期に改修されている山城の姿を考える必要がある、と述べられています。

次に、出雲国の戦国期の状況を以下の四期に分けて紹介されました。

I 期：応仁の乱（1467 年～）からの時期守護代尼子氏による出雲国内国人への平定戦

II 期：大内義隆の出雲侵攻戦（1542～）大内氏対尼子氏

III 期：雲芸攻防戦（1562～1566）尼子氏対毛利氏

IV 期：尼子氏復興戦（1569～1571）尼子勝久の復興戦出雲からの退去

これらの時期に出雲国内で激しい攻防戦が行われ、山城も各時期に応じて改修がなされていると指摘されました。

その上で、松江市内の春日城、熊野城、満願寺城、出雲市の鳶ヶ巣城、安来市の勝山城などの個別の事例を紹介されました。

例えば、戦乱期に長期間利用された城では、各時期で改修部分に変化がでるそうです（物資集積のため広い曲輪を造成する時期には、まず東からの敵に備えて東側の防御を固め、やがて西の敵に備えて西側の防御を固める工事を行うなど）。また、陣城として築城された部分と水上交通を監視する部分の二つの機能を併せ持つ山城なども紹介されました。

戦乱の各局面においては、どの部分を重視するかで普請の優先順位も変わり、重要箇所以外は簡略なまま、もしくは途中で作業を放棄した状態のままで山城が使用されると述べられました。さらに、一つの城の中で、異なる武将が分担して普請していた様子が読み取れることも説明されています。

最後に、地域の歴史は地域に住む住民が明らかにし生かすものであること、地域の歴史や文化は次世代に継承されてこそ輝くことを強調され、山城調査の際には参加することを勧められていました。